

■研究・実践の課題（テーマ）

栄養教諭の全校配置の実現を目指して

—栄養教諭のみと学校栄養職員との併用との相違点の解明—

■主任研究者 安達内美子

■共同研究者 新谷 裕

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

一昨年度の愛知地区の45校の各校長と栄養教諭等を対象とした調査結果を基に、栄養教諭の全校配置が必要かを解明するために栄養教諭のみと学校栄養職員との併用している地域とではどのような相違点があるかを調査した。特に低かった「食育指導に対する個別指導」の項目との相関性が高い項目「チームの構築」と「教職員の環境整備」を中心に調査項目を精査して、より多くの自治体並びに学校を訪問して調査する計画を立てた。特に、先回の研究で、千葉県や静岡県では、3年間という期間を設定して任用替えによって学校栄養職員を栄養教諭として採用している。このような学校のシステムによる相違点から栄養教諭の全校配置の必要性の意義を見つけ出ししていく。そこで、研究の目的として「栄養教諭の採用システムの異なる自治体の状況を把握し、その利点と欠点を探ることから栄養教諭の全校配置の実現を目指す」とした。

【研究の方法】

‘18年度の論文で調査した地区に加えて愛知県他地区の調査と19年度に調査した2地区(牧之原市、千葉市)に加えて愛知県とは異なる採用システムをとっている地区の実態調査を行いその比較を行う。

【期待される成果とその後の予定】

この調査によってそれぞれの自治体や学校は、他の自治体や学校の状況を知るとともに、その利点と欠点を知ることができると考えられる。特に栄養教諭がいることによって、どのような効果が期待できるかを強調し栄養教諭の必要性の再認識に繋げていきたいと考えていた。しかし、4月7日に緊急事態宣言が発令され、小中学校が閉校となってしまう、予定していた自治体や学校との調査に移れない状況になってしまった。SNSの調査に切り替えて考えたが、このような状況下ではしっかりとした調査はできないと考え、共同研究者のこれまでの活動について調査することにした。その結果を基に、コロナの終息を見ながらどのようなことが栄養教諭としてできるかを模索することとした。学校給食が戦後スタートしてから73年が経過して以来、このような状況が起ころうとはだれも想像すらしていなかった。栄養教諭の仕事目的は、児童生徒の栄養と指導及びその管理である。この栄養の指導の中に、コロナ等にも負けない免疫力を作る体の元になる食育指導が大きな注目がなされているのではないだろうか。特に体温をあげて免疫力を高めるためには、児童生徒に日常生活

の中で心掛けさせたいことがある。①適度な運動②十分な睡眠③バランスのとれた栄養である。3番目が、栄養教諭として行うべきことである。このようなことを実践していくことによって栄養教諭の配置数の増加に繋がると考えられる。